



# ますます高まる コンクリート診断士へのニーズ

原島 実

学生時代、コンクリートとも、構造力学とも無縁だった私が、大学の先輩との縁でコンクリート構造物の補修・補強をメインに創立されたコンサルタント会社に入社しました。入社以来、各種コンクリート構造物を中心とした調査・診断、定期点検業務や、コンクリートの構造、材料、非破壊検査等の実験・開発にも関わり約11年が経ちました。

私が入社した頃は、阪神・淡路大震災の後で主要な構造物に対して耐震補強が行われ、「補強」と言う言葉が一般化してきていたのではないかと思います。しかし、「補修」と言う言葉はまだマイナスイメージが強く、悪くなってしまうから補修して延命させたいといった、現在で言う「事後保全型管理」とか「対症処療法型管理」のみが行われていたように思います。そして、このような業務に関わる中で、私は社内外の先輩方に指導して頂きながら、コンクリートや調査・診断に必要な基礎知識を少しずつ覚えていきました。

このような時に、「コンクリート診断士」と言う資格が2001年から創設される事を知りました。会社として、個人としても将来必要になる資格と思い、診断士の資格を取得したいと考えようになりました。受験資格について調べると、「コンクリート技士」を取得している事で、基礎科目が免除される事を知りました。コンクリートについて、まだまだ知らない事だらけだった私は、まずは基礎知識を身につけるためにも「コンクリート技士」を取得する事にし、診断士の試験開始の年までに合格出来ました。そして、2001

年の第1回目の「コンクリート診断士」を受験し、何とか1回で合格する事が出来ました。

コンクリート診断士となってからも、調査・診断業務に従事する事が多く、様々な施設管理者とも一緒に仕事させて頂きました。取得当初は、施設管理者であっても、「コンクリート診断士」と書いた名刺を渡すと、「こんな資格があるんですか？」と聞かれる事もよくありました。実際、構造物の調査・診断関係に従事している関係者には注目されていましたが、創設直後は有資格者が少ない事もあってか、業務で「コンクリート診断士」の知識は必要とされるものの、資格そのものが求められる事はありませんでした。

しかし、近年、既設構造物に対する維持管理、調査・診断の出来る専門技術者を必要とされる時代になってきたと感じます。依然厳しい財政状況が続く中、高度経済成長期に次々と建設された既設構造物の補修や更新への対応が年々増加しつつあります。しかし、容易に更新する程の財政力はなく、既設構造物を安全・安心に出来るだけ長く供用させる事が重要となっています。また、「コンクリート診断士」の有資格者も増え、他団体からも構造物診断系の資格が創設されたため、ここ数年、施設管理者が発注する維持管理等に関する業務では、担当者の条件として、診断系の有資格者が求められる事も多くなりました。私自身も、以前の事後保全型管理による業務から、現時点で行う対策費だけの検討ではなく、将来の維持管理費まで含めた費用対効果を、ライフサイクルコストとして検討す

る事が多くなりました。

最近では、施設管理者が管理する全施設や、橋梁全体、トンネル全体など施設全体をグルーピングして、将来の維持管理・更新費用の効率的な投資方法を検討する事も多くなりました。これらを検討するために、投資の世界で効率よく投資するための判断方法として良く用いられているアセットマネジメントと言う手法を用い、長期間の維持管理費用を最小化する方法や、年間費用を平準化する方法などを検討する事が多くなりました。

新設構造物においても、将来の耐久性を意識して建設されるようになり、コンクリート構造物では、かぶりコンクリートの重要性が認識され、初期欠陥に対する診断も、コンクリート診断士に求められるようになり、実際に自分も現場へ出向く事が多くなりました。

ここ数年、コンクリート診断士をはじめとする、診断系の専門技術者が求められ、また、要求される事項も既設構造物の劣化診断・補修設計から新設構造物の初期欠陥原因の判定・対策設計までと広範囲になってきています。自分自身も、様々な業務に関わり、知識不足を痛感させられる事も多いですが、社会のニーズに応えられるように技術力向上を目指していきたいと考えています。



はらしま・みのる /  
リテックエンジニア  
リング(株) 技術本部  
技術部 主査